

# A I 化時代の対人援助職に求められる研修プログラムの検討

－ 人称の身体感覚を拡張するワークの分析から －

廿 日 出 里 美

Consideration of Training Programs Required for Interpersonal Professionals  
in the Age of AI: Analysis of Work that Expands the Body Sense

Satomi HATSUKADE

保育科,  
安田女子短期大学

## 要 旨

本研究の目的は、来るべきA I化時代に備えてA Iとは異なる生身の人間の「感覚力」に着目し、人とかかわる職に就く人々に向けた研修プログラムを開発することにある。大量の情報を瞬時に処理することに長けたA Iは将来、職場でどのように活用され、人々の関係性にどのような変化をもたらすか、現時点での将来像を予測しておく必要がある。昼寝などの睡眠時の乳幼児の安全・見守りや送り迎え時の保護者対応、絵本の読みかたり等の業務にA Iが登用された場合、そこで働く専門職の意味合いや養成、ならびに、研修内容にも大きな影響を及ぼすと考えられる。経済中心の原理や従来の仮説検証型の自然科学的方法とは異なる未来像を描く方途として、本論では人称の身体感覚を手がかりに、パフォーマンス・アーツのワークショップにおける長期的フィールドワークを通して、対人関係専門職に就く人々を想定した感覚力の拡張を目指すプログラムの検討を試みる。

キーワード：実践、芸術、ワークショップ、フィールドワーク、活動理論

## は じ め に

直接、人々と関わりながら職務を遂行し、対象者を身体的、精神的、社会的に支援する実践を伴うような業務を本研究では、対人援助職と呼ぶ。対人援助職の例としては、保育、教育、看護、医療や介護のほか、ソーシャルワーカー、心理技術者等があげられる。対人援助職の人手不足、長時間労働は社会問題となり、業務の効率化が問われ、A Iの導入も検討されている。ウィズコロナの時代はその傾向にますます拍車をかけるであろう。

保育、教育、看護、医療や介護は実践的な意味を有する。一般に科学は実践を完全に対象にしてしまうが、芸術は実践に主体から迫ろうとするとところに特徴がある。その中間に位置づけられる対人援助職の専門家はA I化時代の実践とどう向き合うべきなのか。本研究では、筆者が実施

した人称の身体感覚を拡張するワークの分析からA I化時代の対人援助職に求められる研修プログラムを検討する。

## 方 法

筆者は、保育学生ならびに保育者を対象としたワークショップとそのためのフィールドワークを2008年から現在まで、毎年欠かさず、独自に企画・開催している（廿日出 2011、2019）。ワークショップの様子は写真の通りである。本研究では、パフォーマンス・アーツの稽古やワークショップにおける長期的フィールドワークを通して開発した研修プログラムのうち、人称の身体感覚に着目したワークの検討を中心に行う。フィールドとしたパフォーマンス・アーツは、演劇、コンテンポラリーダンス、ダンス、オイリュトミー<sup>1</sup>、舞踏、古武術、わらべうた、ボイストレーニング、朗読、影絵等、多岐にわたる。



写真：演出家きだつよし氏による演劇ワークショップ（2018年）の様子

## 結 果 と 考 察

対人関係援助職に就く人に向けて2019年に開発した人称の身体感覚を拡張するワーク・メニューは、表1の通りである。ワーク・メニューは80分の講座2コマで計画され、「実践に向かう知の再構成」のテーマを第1講「主体と対象」と第2講「対話的なやりとり」から成る半日のプログラムとして、実施された。参加者は保育者を目指す高校生、短期大学生、大学生、現職の保育者である。

<sup>1</sup> オイリュトミー (Eurythmy)とは、オーストリアの神秘思想家、教育家であるルドルフ・シュタイナーによって新しく創造された運動を主体とする芸術である。

表1：人称の身体感覚を拡張するワーク・メニュー

<p>第1講 実践に向かう知の再構成～主体と対象～ (80分)</p> <p><b>主体</b></p> <p>一人称のカラダ</p> <p>■ワーク1：主体をもって歩く 止まる</p> <p><b>対象</b></p> <p>■ワーク2：対象をもって歩く（距離／アイコンタクト／挨拶／遮る・避ける／仕掛ける・応じる等）</p> <p>■ワーク3：スマートフォン（操作する・操作される）</p> <p>■ワーク4：スローモーション（アクション・リアクション）</p> <p>■ワーク5：手つなぎダンス（リードする・リードされる）</p> <p>二人称のカラダ</p> <p>■ワーク6：ミラーゲーム（相手になる）</p> <p>三人称のカラダ</p> <p>■ワーク7：21まで数える</p> <p>■ワーク8：ひとつの肺になる</p> <p>第2講 実践に向かう知の再構成～対話的なやりとり～ (80分)</p> <p>対話的なやりとり</p> <p>■ワーク9：拍手まわし（カラダを使って話す・聴く）</p> <p>■ワーク10：わたし・あなた（オファーを明確にする フォーカスをみきわめる）</p> <p>■ワーク11：声（アクション）まわし（複数課題の同時遂行）</p> <p>■ワーク12：展覧会の絵（受け取り・受け渡す主体） 気づき・感想</p> <p>■ワーク13：つもりのアクト（「理解する知」から「行為する知」に向けたグループワーク）</p>
--

【註】一人称，二人称，三人称のカラダの区分は，笠井叡，2011，『カラダという書物』書肆山田，および，笠井叡，2016，『カラダと生命』書肆山田を参照した。

世界的な舞踏家、オイリュトミストの笠井叡（2016）は、自身の著書のなかで、次のように述べている。

大人が一人称を獲得したときの「私」とはカラダの内部から生じます。「私」とはそのとき、カラダの内部から関わることでできる存在です。[中略] 人称は、人間形成だけでなく、言語の本質的な形態やあるいは社会形成全体に根源的な働きをします。それは人称の働きが、人間の意識のあり方と深く結びついているからです。[笠井叡 2016: 119-120]

笠井（2016）による、一人称に覚醒する以前の二人称は内側ではなくて「外側から関わることでできる私」という存在であるという指摘は非常に興味深い。また、直立後に初めて語り始める二人称は、相手の内部にまで入りこんでいるという。この二人称の語る対象は、他者でなく、紛れも無く、自分を指す。そうした過程を経た後、子どもは、一人称を語る時、初めて概念言語を用いるようになり、自分と他者を分ける言語を用いるようになる、と笠井は指摘する。

自分と他者を分ける言語を用いるに至るまでの過程で、乳児は概念言語の意味そのものでなく、発せられる声全体の印象を受け止めていると予測される。女優・声優の大方斐紗子氏によるイメージ発声のワークでは、言葉の意味に捉われないことなく、「あ・え・い・う・え・お・あ・お」等、音の並びのみのテキストに「産まれたばかりの赤ちゃんを傷つけないように」「5月の風が木綿のカーテンを揺らすように」等、独自の具体的なイメージを付与した音読を試みる課題が取り入れられていた。これは、概念言語ではなく、イメージを手がかりに、心情そのものから流出する表現に接近しようとしたアプローチの例である。

概念言語においても、〈意識〉の向け方によって絵本の読みかたりの印象は劇的に変化する。

たとえば、音読において「森」を [mori] と機械的に文字を記号として音声にするのと、話し手のイメージする「森」を存在させるよう [mori] と発声するのでは、どんな初学者が聴いても明らかな違いを認識できる。

対象を〈意識〉した音読でも、その傾向は顕著である。日本でロングセラーとなっている絵本『ぐりとぐら』のテキストに次のような会話のシーンがある。「どんぐりをかごいっぱいいっぱいひろったら、おさとうをたっぷりいれて、にようね」「くりをかごいっぱいいっぱいひろったら、やわらかくゆでて、くりむにしようね」。この対になる会話を音読する場合、対象を全く意識せず並列して読むのと、のねずみの「ぐり」と「ぐら」のうち、自己投影した一人称から対象となる二人称に提案したり、同意を求めたり、説得しようとして読むのでは、聴いている人への印象が全く異なってくる。このような対象に向けられる「感情」を数値化して機械に読み込みこませ、自動音声サービスとして代用することは、果たして可能であろうか。

一人称のカラダ ■ワーク1と■ワーク2は、笠井(2016)が指摘する、一人称中心の「私は～したい」あるいは「私は物事をこう考える」あるいは「私はこういう世界観をもっている」という[主体]の「歩く」「止まる」といった運動行為と[対象]を組み合わせたワークの具体例である。[主体]■ワーク1：主体をもって歩く 止まる、および、[対象]■ワーク2：対象をもって歩く(距離/アイコンタクト/挨拶/遮る・避ける/仕掛ける・応じる等)は、実際にコンテンポラリーダンスのワークショップにおいてよく用いられ、小野寺修二氏、スズキ拓朗氏、仁田晶凱氏によるワークショップでのファシリテーションを含め、観察された。<sup>2</sup>このワークは、ファシリテーターの運用によって参加者に合わせた自由なバリエーションが可能になる。参加者は、自身の傾向を俯瞰で捉え、対象を観察し、自然発生的に生まれる自身の感情をモニターしながら、いったん日常の職務から離れ、“ワークショップ”という守られた空間で自分と他者を客観的に観察し、繰り返し擬似的な体験が得られる点に魅力を感じ、メニューに加えた。筆者が行った人称の身体感覚を拡張するワーク・メニューの参加者による感想は表2の通りである。表3のように、参加者は自身の傾向やタイプを見つめ直すことにもつながる。

一人称の私を意識した時に、自分の体なのに思うように動かないことがあったり、アイコンタクトで伝えたことが伝わっていなかったりと、自分で自分をコントロールできない自分のなかの他者性に気付くきっかけとなる。

■ワーク3、■ワーク4は、コンテンポラリーダンサーでコンドルズを主宰する近藤良平氏のワークショップ・メニューを参考に取り入れている。動きを交替で行ったり、スローモーション

表2：ワークの参加者による感想：■ワーク1～2 [抜粋 下線筆者]

ワークを通して、私自身、自ら発信するのを好む一面がありながらも、場の空気を読み、相手に合わせていこうとする一面もあるように感じた。
まわりを見て、その場に応じた動きをする一方、誰も××しないのなら、△△しようと発信する場面もあったように思う。
自分という一人の人間が他者の中に入っていき、積極的に関わろうとすることで、相手はどう思っているか、相手ありきのものでなくて、自分がどうしたいかということを考えていかないといけない。

<sup>2</sup> ベルギーのブリュッセルを拠点とするダンスカンパニー Rosasと王立モネ劇場が設立したコンテンポラリーダンスの専門学校P.A.R.T.S. (パーツ)においても、主体と対象をもって歩くワークは独自のトレーニング法として取り入れられている。

表3：ワークの参加者による感想：■ワーク1～2（自身の傾向やタイプ）〔抜粋 下線筆者〕

自分からきっかけを作る事のほうが私はとてもやりやすかった。しかし、その後のワークをしていくうちに、きっかけを作るのは自分だが、周りに様子を気を配ったり、相手を意識したり、また、観察しているうちに、応じる事も同時にしていることに気がつきました。
活発な子、積極的な子は自分を出しやすいかも。大人しい子、消極的な子ども外には出さないが「こうしたい」という思いは持っている。まさしく自分は後者の方であった。
一人称のカラダのワークでは外部からのストップ・スタートは歩きやすく、動き出そう！！とできたが、自らが主体となって動き出すことは難しく、周りが動いてくれることや止まってくれるのを待っている状態だった。

を取り入れたりすることで、操作する、操作されるとき、普段の生活では意識されることのない、微細な身体感覚を観察可能にする学びの機会が増大する例である。

アクションとリアクション、および、リードするとリードされるという役割分担が予め決めて取り掛かれるワークは導入として入りやすい。次の段階としては決めごとなしで動く、■ワーク5：手つなぎダンス（リードする・リードされる）と■ワーク6：ミラーゲーム（相手になる）は、より、日常の実践感覚に近くなる。

日本でコンタクト・インプロビゼーション<sup>3</sup>の団体C.I.coを主宰する、勝部ちこ氏と鹿島聖子氏のワークでも、「100%の主張と100%の協調、そして100%の時間」を提唱し、■ワーク5：手つなぎダンス（リードする・リードされる）が取り入れられていた。舞踏家の伊藤キム氏は、さらに、一本ずつ差し出す指先がふれたなかで感じる関係性と、指先の接点が離れたあとも持続・変化するダンスワークショップを絶妙に取り入れ、多様な年齢層の参加者を主張と協調が融和する即興的なダンスへと参加者を導いていた。こうしたワークは教育機関に先立って、東京都ではスタジオを備えた神楽坂セッションハウス、一般社団法人天使館、広島市内では公共ホールを利用し、活動を展開しているフリーハーツ等の民間団体等、首都圏や地方を問わず、精力的に展開されている。そこには、ダンサーを目指す人たちだけでなく、さまざまな年齢、職種の人々が何かを求めて集い、アートと社会の相互反映的な対話を重ね、実践の刷新を図っていく社会芸術の源泉が見て取れる。

二人称のカラダ ■ワーク6：ミラーゲーム（相手になる） このワークは、コンテンポラリーダンサー二人組のユニットほうほう堂、新舗美佳氏、福留麻里氏によるワークの真骨頂で、特筆に価する。ほうほう堂のワークでは、相手とペアと向き合い鏡合わせ動くだけでなく、同じ方向に相似形に並んで移動したり、途中でペアが入れ替わったりする等、独自の手法を編み出していた。観る側と観られる側の往来が起きるとき、筆者が行った人称の身体感覚を拡張するワーク・メニューの参加者は表4のような感想を述べている。

なかには「相手を意識しすぎると動きが硬くなる」という感想もみられたが、それは、自他を切り離し、その境界がより明確になるような観察法を取り入れていたからではないだろうか。次の三人称のカラダでその問題に詳しくふれてみよう。

三人称のカラダ 心理学者の佐伯（2017）の説明する三人称的なかわりは、対象を「私」と切

<sup>3</sup> C.I.co.パンフレットによれば、コンタクト・インプロビゼーションとは振付家でダンサーのSteve Paxtonが創始した、身体を使った対話形式のダンスで、その基本は人とのコンタクトであり、その触れ合うポイントで、体重を掛け合ったり、支え合い、力学に則って共に想像していくダンスを指す。

表4：ワークの参加者による感想：■ワーク3～6〔抜粋 下線筆者〕

相手の働きかけで自分はどうかなるのかスローモーションでどのような表情になるかを感じながら対話的なやりとりをしてみると、 <u>主体、対象を乗り越えた自分が生まれ自分の体からとびだした自分（相手）を好きになる事</u> がよくわかりました。
動きがスローモーションになって相手の動きから逃げようとする時に考える時間もあるので自分の中に余裕もあり主体になった時には <u>たくさん動きを使ってこんな動きをしてみたい</u> と考えるようになった。
相手の思いを感じるときは、 <u>顔の筋肉や目の動きなど、細かい表情を読み取っていくことが大切で、しっかり観察していくことで見えてくるものがある。</u>
相手の鏡像になるというワークでは、相手の鏡になろうと <u>相手の動きに意識を集中させ見ており、次はどんな動きをするのかも少し想像しながら動くことができた。</u> 一緒に動きをすることで、 <u>お互いの気持ちを通じ合う感覚や相手の気持ちになって考えることができるようになる</u> と感じた。
対象者のまねをしようと思えば、 <u>よく観察しようとする。</u> それは動作だけでなく、 <u>対象者の気持ちまで理解しようとする</u> ことにつながり、次第に <u>一体感も生まれる。</u>
指先まで意識し、相手を見て、まねることで自分が普段使わない細かい筋肉の動きも感じる事ができた。私自身、普段、子どもを前にして体幹まで意識しているかという振り返りにもなった。今回の学びでは <u>相手を意識する</u> ということがとても多かった。その中で行動タイプを知ったり、体の細かい動きをしたりすることで、 <u>相手と共感する嬉しさ、幸せ感を感じた。</u>
相手の動きにまかせているばかりの自分があったが、相手と同じ動きや呼吸を感じることで、段々と、 <u>受け身だけでなく自分からの動作のはたらしかけもしてみたい</u> と感じた。実際に自分から動いた時に相手の人が自分と同じ動きをすることで、自分と同じ感覚や思いがあるのかな？ <u>と思えるようになった。</u> すると、 <u>段々と初め思っていた恥ずかしさや自分から動くことへのためらいなどが消えていき、楽しくなってきた。</u>
人と接することが好きではあるが <u>積極的に声をかけたり、人前に出ることが苦手</u> であるが、ワークに課題、目的があるなかで、 <u>相手とアイコンタクトをとったり、同じポーズをして共感共有したりすることで全体の中の一人であること、相手からの反応があれば安心する。</u> また、 <u>主体と対象を考えると自分の内面から出てくる性格も知ることができ、言葉ではなく体で対話をしているようで相手への親しみが持て、自分の気持ちを解放していくことができた。</u>

り離して、個人的関係のないものとして、個人とは無関係な（モノ的な）存在と見なす。傍観者の観察から「どうすると、どうなるか」を「客観的」に対象を調べ、そこから客観的法則（ないし理論）を導出し、それで説明するという。舞踏家の笠井（2016）のいう三人称ないし非人称は、佐伯と異なり、「聞くことが喋ることである」「喋ることが聞くことである」言語であるという。語りかける言葉の対象は限定されず、空間全体に及ぶ。そこでは、二人称を保持しながら三人称の視点を獲得するカラダが目指されている。

■ワーク7：21まで数える<sup>4</sup>は、きだつよし氏のワークショップ・メニューを参考に取り入れた。

■ワーク8：ひとつの肺になるは、舞踏家・オイリュトミストの笠井観氏のワークを参考にした。そこで用いられるオイリュトミーはとりわけ、独自の呼吸法と聴覚の機能を使う身体技法である。筆者が行った人称の身体感覚を拡張するワーク・メニューの参加者の感想は表5の通りである。

<sup>4</sup> このワークの内容は、絹川友梨、2002、『インプロゲーム』pp. 247-248で紹介されている。全員がお互いにアイコンタクトができるように、小さい輪をつくり、全員で協力して、1～21までの数を数え上げる。一人は一回につき、ひとつの数字を言うことができる。何度言ってもかまわないが、もし、複数のプレイヤーが同時に数を言ってしまったら、1に戻って数え直す。21まで複数の人の声が重ならずに言えれば課題達成となる。

表5：ワークの参加者による感想：■ワーク7～8〔抜粋 下線筆者〕

<p>グループで21まで数えるときのことに限っては、呼吸を感じ、自分がいつ言うか、周りを目、耳、息づかいなど感覚を使っているかということから、視野を広くもつことも大切。</p>
<p>自分の意見ばかりを言おうとするとうまくいかないが、他の人が言いたいのではないかと、言おうとしているのではないかと、という呼吸を感じることで、うまくいくようになる。目の前の人を自分であるかのように感じる事が相手をわかっていく手段となる。</p>
<p>体温とともに伝わる温かさや思いになんとなく一体化した様な思いも感じられ、心地よい時間が持てたように思います。私達は子どもにきっかけを与えているようですが、もしかすると、与えられ、そこをふくらませ、次につなげていくかを考えていく必要があるのだと感じました。呼吸・まわりの雰囲気、あうんの呼吸や息づかい等、音にならない音を子どもと一緒に感じ、伝え合い、なごやかな楽しい気分を味わうとともに、身体のだの部分を使い、どうリズムをきぎむか、何を思い描くかを楽しみたいと思う。</p>

対話的なやりとり 対話的なやりとりでは、演劇的な手法を多く取り入れている。これらは、2011年から2020年まで毎年、企画・実施したきだつよし氏によるワークの長期的なフィールドワークから多くの示唆を得ている。■ワーク9：拍手まわし（カラダを使って話す・聴く）、■ワーク10：わたし・あなた（オファーを明確にする フォーカスを見極める）、■ワーク11：声（アクション）まわし（複数課題の同時遂行）はすべて、きだつよし氏のワークを参考にした。筆者が行った人称の身体感覚を拡張するワーク・メニューの参加者の感想は表6の通りである。

表6：ワークの参加者による感想：■ワーク9～11〔抜粋 下線筆者〕

<p>今までは「伝える」ということは言語で伝えるものだという固定観念があったが、今回の実践を通して、体や視線などで表現することができることを学んだ。しかし、体や視線を使って表現するということは言葉で伝えることよりも相手をよく見て集中して伝えていく必要がある。そして、アイコンタクトをとるとことは自然と笑みがこぼれ、相手を意識して見ようとする。アイコンタクトをとることで自然と相手の顔を見ること、表情がやわらかくなるので、楽しく相手とスキンシップやコミュニケーションをとることができる。「伝える」ということ一つにおいても、これだけ深く考え実践することができることを学んだ。</p>
<p>人と関わる上で言葉だけのコミュニケーションを重視するのではなく、アイコンタクトを使って私達が普段関わる子どもは、言葉でなく、表情や態度や雰囲気や自分の思いを伝えることが多い。それをどれだけ丁寧に汲み取ることができ、応じることができるかで、子どもとの信頼関係も大きく違ってくる。</p>

対話的なやりとりでは、インプロゲームを成立させることよりも、参加者の気付きが得られるようなファシリテーションを重視すべきである。筆者が行った人称の身体感覚を拡張するワーク・メニューの参加者の感想は表7の通りである。

表7：ワークの参加者による感想：■ワーク9～11（気付き）〔抜粋 下線筆者〕

<p>保育の中で対象となることが多い子ども達に対して、指導する時や声かけをするとき、つい指示を出して、子どもたちに伝わっているという前提で保育を進めたり、個別の声かけをしているが、今日のワークの中で行った声（アクション）まわしで、もしかしたら、うまく伝わっていないこともあったかもしれないと、日々の保育を見直す機会になった。子どもたちの中で他のことを考えたり、気になることをしていると、こちらがオファーを出してもうまく、届いていないことがあったかもしれない。そのことで、子どもたちに対して「聞いていなかった」ではなく、どのようにオファーを出したらいいか、どんなふうにオファーをしたら、子どもたちに届くかという、創造的な「知」につながった。</p>
<p>ワークをやってみて、自分が伝えることに必死になっていたと終ってから反省しました。受け取り手の様子にも配慮が必要だということをやってみて気付くことができました。</p>
<p>視野を広くもち、はっきりした動作で伝えると、相手との関係の中に親しみや楽しい気分、幸せな気分が生まれていった。相手のことを考える力は大切だと思った。他者の視点を獲得することで創造的な“知”がつくられていくように思った。職場でこのワークを研修報告などで行ってみると職員間のコミュニケーション能力も高まっていくのではないかと考えた。</p>

以下の三点から筆者が行った人称の身体感覚を拡張するワーク・メニューの特色を三つの観点からここで、まとめておこう。

#### (1) AI技術の応用可能性に対する検討

山崎(2018)によれば、AI技術の応用可能性は、環境の質(音、光、気温、温度、CO<sub>2</sub>、物の配置・動線)、対象者の様子(顔認証、活動ログ、交友関係、表情認識、発話記録)、援助者のかかわり(動線、活動量)のセンシングにあるという。そこで、情報を客観的に可視化・評価することに主眼を置き、“正確”に“高密度”なデータがIoTカメラで記録される。山崎はそうして得たデータをAIによる解析やフィードバックをかけ、それらを対人援助職の専門家が解釈・意味づけすることによって、物理的・心理的負担を軽減できると提唱する。AIの導入は本当に負担軽減に繋がるかについては、慎重な検討を要する。本研究のワーク参加者にとって、データの解釈・意味づけ以前の「観察」がいかに大切であるか、先の表2～7の感想からも明らかである。本研究のワークは、IoTカメラによる“正確”で“高密度”なデータを鵜呑みにせず、身体感覚の拡張によって、自らの実践をより幅広く制御し、転換・創造できるような方途を試みる機会を提供している。センサー(感知器)等を使用してさまざまな情報を計測・数値化する技術とは対照的に、実践の世界は白もあればグレーもあり、数値に単純に置き換えられず、清濁を併せ含んでいる。そうした複雑で混沌とした状況下で他者に当事者として向き合い、観察するなかで、自己が更新される“止揚”の瞬間に焦点を当て、そこを目指す点がAI技術の応用と明らかに異なっている。

#### (2) パターン・ランゲージの可能性に対する検討

専門家の実践知を可視化・共有化する試みは井庭(2019)による「パターン・ランゲージ」の手法でも試みられている。パターン・ランゲージは複数の人の語りから、ある領域の問題発見・解決の実践知を言語とイラストに凝縮し、それらをツールに對話などを通じて、参加者のポリフォニックな考えを引き出すアプローチである。パターン・ランゲージは熟達者・成功者の語りから抽出された振り返りの知であって、実践を産出するのは参加者である専門家自身の自助努力に委ねられている。そこで、本研究では、ショーン(2007)の専門家の知恵にみられるようなピラミッド型の階層的な経験知からいったん離れ、勤務年数や経験に因らず、身をもって「理解する知」から「行為する知」へと転換するオープンな知に関心を寄せている。

#### (3) 人称の身体感覚への着目

本研究のワークでは、これまでのフィールドワークで収集したデータ分析に三木清全集を底本とした『創造する構想力』(2001)を援用し、芸術的認識と哲学的認識との関係を明らかにしたうえで、認識主体と認識対象との一体化を産み出す「感覚力」に焦点を絞り、対人援助職に就く人々に向けた研修プログラムのメニューを開発した。三木によれば、「形式論理は主体の論理でなく対象の論理」である。それに対して「行為の論理は創造の論理として構想力の論理の如きものでなければならぬ」という。行為には身体が必要であり、また行為の対象は抽象的一般的なものではなく、具体的なものである。主体性における身体をパトスと名付けるならば、構想力は、主体的な意味におけるパトスと結び付いている。このパトスは単に我々の身体をいうのではなく、目には見えない社会身体をも含んでいる。表1の■ワーク7:21まで数えるを同じ参加者でリモートと対面の両方で行った際、リモートでは目の前に見えない他者を想像し耳を澄ませ、対面では周囲の参加者の息づかいを注視する等、状況によってパトスを使い分けていた。

保育の内容に係る基本原則に関する事項等を規定した『保育所保育指針』には、「温かい触れ

合いの中で」「和やかな雰囲気の中で」「受容的・応答的な関わりの中で」「安心できる関係の下で」「体の動きや表情、発声、喃語等を優しく受けとめてもらい」「温かく、受容的な関わりを通じて」「子どもの多様な感情を受け止め」「温かく受容的に関わり」「楽しい雰囲気の中で」という表現が繰り返される。しかし、それがどのように行為の論理に成り得るか、当事者として身体感覚を試しながら実践に結び付けていくプロセスに注目する必要がある。

■ワーク12：展覧会の絵（受け取り・受け渡す主体）は、勝部ちこ氏によるワークからヒントを得た創作ダンスのワークである。■ワーク13：つもりのアクト（「理解する知」から「行為する知」に向けたグループワーク）は、きだつよし氏によるワークで実験と実践を重ねたテキストを用いた台詞と動きを伴う、創作劇の活動である。これら二つのワークは参加者全員が当事者性から完全に離脱することなく、より実践に近いかたちで、臨場感あふれた作品づくりが可能になるため、講座の最後に参加者全員で取り組むワークとして取り入れている。筆者が行った人称の身体感覚を拡張するワーク・メニューの参加者の感想は表8の通りである。

表8：ワークの参加者による感想：■ワーク12～13

<p>最後に行った劇では一人ひとりがイメージしたことを伝え合い、イメージをすり合わせながら自分も想像した動きを言葉を使って、集団で一体となって一つの作品を作りあげる楽しさ、面白さを感じることができ、主体的に表現することが楽しくなるような活動の方法を工夫することがたくさんあることを知ることができた。</p>
<p>自分の性格を知る上ですごく面白いと思ったのは、1人で動くことに関しては消極的だったのに、対象ができ、アイコンタクトをするというワークのところでは、とても積極的に変わり、自分のことを見て欲しいという思いがとても強くなったことである。「誰かバスの運転手やる？」と話合っている時に、知らない人ばかりの中でも「私やります」と言えたら、どんなに素敵だろうと感じた。</p>

## む す び

現状は、その都度、身をもって「理解する知」から「行為する知」への橋渡しを模索している段階であるが、研修プログラムを経験した参加者が対人援助職の仕事において、自分の身を守り、新たな知の創造に貢献できる経験を積めるよう、身体知の側面から内容と方法を洗練させていく必要がある。このような傾向は1990年代の初期からマサチューセッツ工科大学メディアラボ<sup>5</sup>を筆頭に、国内では、1993年に慶應義塾大学アート・センター<sup>6</sup>が、2004年に東京工業大学のArt at Tokyo Techが、また、2020年に同大学の未来の人類研究センターが、2005年に大阪大学コミュニケーションデザイン・センター<sup>7</sup>が、2015年に九州大学にソーシャルアートラボ<sup>8</sup>が設置

<sup>5</sup> マサチューセッツ工科大学メディアラボでの研究は、学際的な研究に焦点を当て、中心技術に直接関わる研究ではなく、技術の応用や、斬新な方法による統合分野を開拓しているため、そこでのプロジェクトの多くは、芸術的な性格を多分に含んでいる。

<sup>6</sup> 慶應義塾大学アート・センターは、大学附属の研究センターで、特定の分野や思想、理論体系にかたよることなく、総合大学の特徴を活かした領域横断性、さまざまな学問分野の成果を総合する立場から、現代社会における芸術活動の役割をテーマに、理論研究と実践活動を展開し、アート・アーカイブの各コレクションは国際的評価を得ている。

<sup>7</sup> 大阪大学コミュニケーションデザイン・センターは、新しいスタイルの教育研究機関として、大阪大学が掲げる教育目標「教養」「デザイン力」「国際性」のうち、「デザイン力＝柔軟な想像力」の育成を目的に設置され、活発な市民参加型ワークショップや地域に拓かれた研究会の活動を展開している。

される等、拡がりをみせている。ワークショップデザイナー育成プログラムを2009年に開講した青山学院大学社会情報学部のパンフレットに次のような記述がみられる。

1人のカリスマが1万人を集めて実施するワークショップよりも、身近な10人を集めて1,000ヶ所で実施するワークショップに価値を置いています。なぜなら、これからの社会を共生的なものにするためには、さまざまなコミュニティや場面でワークショップが繰り返し実施され、多様なコミュニティが結ばれていくことが不可欠だからです。〔筆者 傍線〕

経済の効率性を優先するあまり、少人数の履修者授業科目を否応なく非開講にする高等教育機関がある昨今、そうした理念から学ぶ点は多いのではないだろうか。

公共ホールや一般社団法人におけるアウトリーチに加え、近年は、この分野で起業する民間団体の活動もみられるようになった。しかし、その一方でなぜ、首都圏・地方、国外に在住する演出家やダンサー等のアーティストを教育現場に招き入れ、ワークショップを開催するのか、伝統的な教育関係の経営者や管理者のなかには未だに根強い抵抗感、不信感、懐疑の目が向けられていることも事実である。国内では一部の高等教育機関を除き、その実践的な展開は端緒についたばかりである。既存の言い尽くされた理論や概念を用いて事象を説明することから、どのように脱出するかが問われている。人称の身体感覚を拡張するワークプログラムは、現行の対人援助職を養成する教育課程に組み込まれていない。しかし、AI化時代のダイナミズムに挑む謎解きの鍵として、ひとつの可能性を秘めていると思われる。

#### 主要引用文献・参考文献

- 井庭崇編, 2019, 『クリエイティブ・ラーニング』慶應義塾大学出版会。  
 笠井叡, 2011, 『カラダという書物』書肆山田。  
 笠井叡, 2016, 『カラダと生命』書肆山田。  
 絹川友梨, 2002, 『インプロゲーム』晩成書房。  
 佐伯胖, 2017, 『子どもがケアする世界』をケアする 保育における「二人称的アプローチ」入門』ミネルヴァ出版。  
 ショーン, ドナルド, 柳沢昌一・三輪健二(監訳), 2007, 『省察的实践とは何か: プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房 [Schon, Donald A., 1983. *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. Basic Books.]。  
 中川李枝子作・大村百合子絵, 1967, 『ぐりとぐら』福音館。  
 廿日出里美, 2011, 「保育者養成という現場の日常－人々を实践に向かわせる知の再構成－」『教育社会学研究』第88集, pp. 65-86。  
 廿日出里美, 2019, 「実践に向かう知の再構成」『教員免許状更新講習テキスト幼稚園教員コースB 3: 豊かな保育実践へのワーク』安田女子大学・安田女子短期大学, pp. 2-14。  
 三木清, 2001, 『創造する構想力』(大峯顯編) 京都哲学選書第18巻, 燈影舎。  
 山崎俊彦, 2018, 「IoT・AI技術の保育への応用可能性」(最終閲覧日: 2020年7月22日) <https://today.tv/contents-list/2018FY/cedep/08>。

<sup>8</sup> 九州大学ソーシャルアトラボは科学と理性だけでは解決困難な社会的課題に対して、アートを用いて解決へと導く方法に関する研究・教育・実践・提言を、学際的共同作業を通じて行うことをミッションとしている。

[付記] 本研究で考案した研修プログラムの内容は平成20～22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「実践知の創造を支援する活動システム理論の構築」（研究代表者：廿日出里美，課題番号：2053078），ならびに，平成23～25年度科学研究助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）））「実践知の創造を支援するワークショップのアクションリサーチ」（研究代表者：廿日出里美，課題番号：23531145）助成を受けた研究成果の一部である。ワークの企画趣旨は筆者個人の見解であり，所属機関とは無関係である。

[2020. 9. 17 受理]

コントリビューター：永田 雅彦 教授（保育科）

